

資本主義の危機と歴史の危機

著者 水野和夫 発行所 集英社

水野氏は1953年愛知県生まれ、早稲田大学大学院経済学研究科修士課程修了
三菱UFJモルガンスタンレー証券チーフエコノミストを経て(日大国際関係学部教授)
内閣府大臣官房審議官＝経済・財政分析担当、内閣官房内閣審議官＝国家戦略室を歴任
*主な著作＝「人々はなぜグローバル経済の本質を見誤るのか」日本経済新聞出版社、
「超マクロ展望 世界経済の真実」菅野稔人氏との共著・集英社新書など

水野氏の仮説抜粋～もともと利子は神に帰属していた{時間}を人間が所有することを意味していました(利子とは時間に値段をつけるということ)その結果たどり着くゼロ金利というのは、先進国12億人が神になることを意味する。

これは時間に縛られる必要から解放されるということ「タイムイズマネー」の時代が終焉を迎えるということです。

同様に{知}についても中世までは神の独占物でした。

近代になって国家と大手マスメディアが{知}情報を独占していたのですが、インターネット・スマートフォンの普及により先進国の人間は世界中で何が起きているか瞬時に知ることができるようになり、これもまた12億人が神になった。

そういう意味では資本主義とは神の所有物を人間のものとしていくプロセスであり、それが今ようやく完成しつつある。

{ゼロ金利は資本主義卒業の証}

「日本は新しいシステムを生み出すポテンシャルという意味で世界の中で最も優位な立場にある」日・米・独・仏・英をはじめとした先進国は「より速く」「より遠くへ」「より合理的に」を行動原理とした近代資本主義とは異なるシステムの構築をしなければならぬ～それは資本主義の強欲と過剰にストップをかけるということ。

(注)

20世紀の文化のテーマは「客観性」「合理性」「普遍性」と言われて企業の存在基盤として世界中の会社は大きく発展してグローバル化・富の集中をもたらした。

21世紀の文化のテーマは「肉体性」「固有性」「多様性」であるといわれています。つまり企業発展の根底である文化が大きく変質し企業主役から個人が主役となつてこそ新しい時代の展望が拓けるものであり「日本は新しいシステムを生み出すポテンシャルという意味で世界の中で最も優位な立場にある」との筆者の指摘は正鵠をえていると思料します。